

景観

LANDSCAPE

観

KEIKAN

上越人のDNAを探る

特別企画

寺町万華鏡



寺町ごとはじめ
 寺まち横みち出会いみち
 杉みき子エッセイ「寺町に暮らして」
 私だけが知っている、とっておきの場所
 ぶち景観みつけた
 清盤リポート
 眺めを紡ぐひとひと
 まちは舞台、みんなが主役／読者より

上越市
 景観形成情報誌
 2004

No.6



景観

LANDSCAPE

観

KEIKAN

上越市景観形成情報誌「景観」第6号

〒943-8601 新潟県上越市木田1丁目1番3号 TEL 025-526-5111 FAX 025-526-8363

この情報誌は再生紙を使用しています。

特別
企画

寺町 万華鏡

TAKADA
TERAMACHI
KALEIDOSCOPE



寺町まで歩く。
雁木を通り、線路沿いまで来た時、踏み切りで警報機が勢い良く鳴り始め、赤い信号が点滅した。遠く線路の先を見ながらなにかということもなく待っていると、線路脇のコスモスや人間をまぎとるような勢いで列車が通過する。再び歩き出す。すると、そこはもう寺町だ。

寺町は、異なる宗派の寺院が66ヶ寺も薈を並べる、全国でも珍しい寺院群の町だ。

寺のめぐりには鬱蒼とした林が、墓石を囲んで天までぐっと突き出している。境内には、そこに住む人の手で、小さな植物が植えられ、かれんな花を咲かせている。寺内はあくまで清澄で、静かだ。

だが、一步通りへ出ると、そこは人々の生活の場。色とりどりの洗濯物がアパートのベランダにかけられており、外国の女性が背筋を伸ばして歩いたりもする。山門の近くで若い母親とおばあさんがお喋りをし、そばでは子供たちがたわむれている。

寺院と民家がまだらになって、木々に包まれ、静かに深く息をしている。そこに、生きている者のざわめきと、死者の眠りが混在しているのが寺町だ。

そこには信仰と伝説が、深い地脈から今という時に差し出されるように存在し、生きるということにある深みを与えている。時代時代の流れの中で、争いがあり、生活が変わり、人の思いさえもうつろう。だが、うつろいゆく中で確かに定まり、静かに私たちを見つめているものがあることを、寺町は思い出させてくれる。(魚家明子)



たちどまると、寺院がいざなった。
悠久の時の向こう側へ
のぞけば、広がる万華鏡。

浄興寺の参道は、お盆になると灯籠の道が幻想の世界へ誘ってくれます。秋の「城下町・高田花ロード」は、寺町の寺院が花で飾られます。

寺町万華鏡



うっそうとした木々の合間にみえる寺町のまちなみ。右奥は「日本スキー発祥の地」金谷山。(正起高枝屋上より)

北から南に

かけて二キロメートルにおよぶ寺地がつづき、数百年の老杉の下に仏教の寺々が列をなして並んでいる。朝と夕、僧たちが読経に参向するときに、鐘の音はじょうじょうたる神秘なひびきを伝える。私の家はこの寺のそばにあった、だから二、三步歩けば、この日本のパラダイスに達することができた。

テオドル・フォン・レルヒ少佐 (明治日本の思い出) 中野理訳より ※レルヒ少佐は、高田で日本に初めてスキーを伝えた人。

寺町ことはじめ

上越市には時代が違う三つの城がありました。上杉謙信公の居城春日山城、豊臣秀吉の重臣堀氏の福島城、そして徳川家康の六男松平忠輝公が築いた高田城です。



昭和初めの寺町通り

高田城は慶長19年(1614)に築城されますが、わずか2年で忠輝公は改易、その後、寛永元年(1624)に領主となった松平光長公の時代に現在の高田

の姿が造られたといわれています。しかし光長公も改易され、領主がたびたび替わる時代を経て、寛保元年(1741)榊原公が入封し、明治維新まで続くこととなります。

寺町の寺院をよく見ると、高田築城以前の古い歴史と大変興味深い伝承を持つ寺院や、よその土地の歴史がうかがえる寺院があります。これは高田築城に伴って春日山下や福島城下から寺院が移

されて来た結果と、領主が替わるたびに同行してきた寺院が残ったためです。

城下の西側に二列に配置された寺町は、南北2キロメートルにおよび、幕末まで塔頭を含めると130余の寺院があったといわれています。しかし明治維新の神仏分離や太平洋戦争後の農地解放により寺院の経済的基盤が失われ、少しずつ寺内に住宅が建ちはじめました。それでも現在66の寺院があり、稀に見る寺院群を形成しています。

さて、どうしてこのような寺院群ができたのでしょうか？ 徳川幕府の加賀藩に対する防備のため、城下の西に寺院群を配して寺町を造り、いざというときに軍事的機能を持せようとした、というのが定説になっています。



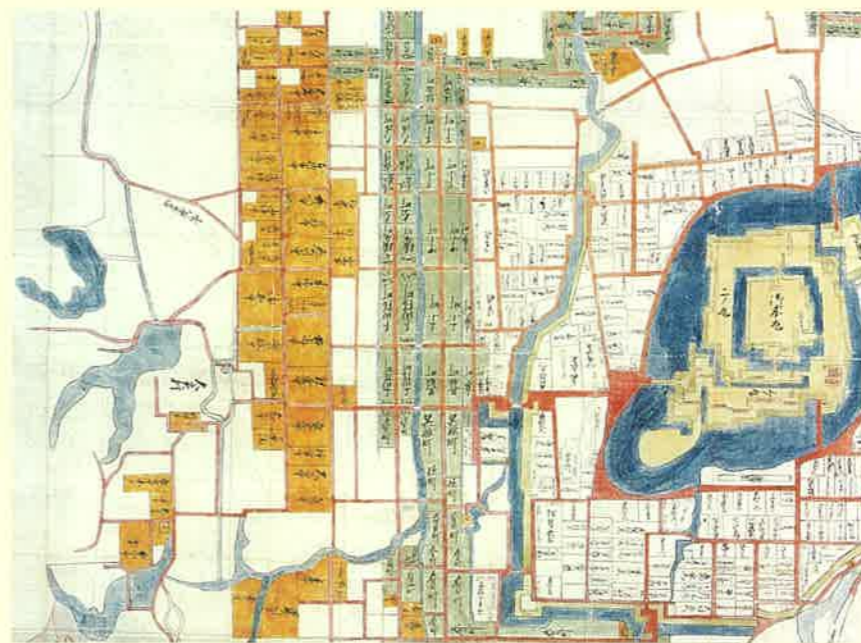
懐かしい浄興寺の虫干しの縁日

しかし、どの寺院も東方、つまりお城の方に向けて門が開かれているのはなぜか？ 寺院の配置に宗派による意図が見えるのはなぜか？ など、軍事目的だけではなく、

平和な祈りの空間としての「高田寺町」が考えられはじめています。



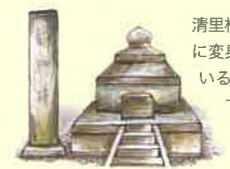
寺町大火の前の本誓寺



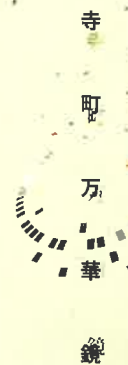
松平越中守家時代の高田城下絵図

寺町豆辞典

その1「龍神井」(善導寺)



清里村の坊ヶ池の龍が美女に変身して、地下で通じている善導寺の龍神井を経て法要に来たと伝えられている。





山門の向こうから

瓦葺の山門や竜宮城風の楼門。その門をくくって見返せば、鏡の国からいつもと違うまちの顔が浮かぶ。

赤門前で見上げる大杉(常教寺) >3

寺まち
横みち
出
会いみち

山門をくぐり、お地藏様にちよつと手を合わせて境内を見わたせば、そこは不思議の国のおもちや箱。落ち葉、木漏れ日、庭を横切る猫さえも違って見えます。



>4 仁王さんのおわす楼門(善導寺)



>5 木立の奥に掛鐘の木堂(長徳寺)



開かれた庭

思わず足を止めて彷徨いこみたくなる不思議の国。草花と樹木と動物大図鑑のページを開いて。

庭。石畳の目地に咲く草花(常教寺) >6



>13 赤良田のお地藏さま(常教寺)



寺町辞典

その2「不許葷酒入山門」

「くんしゅさんもんにいるをゆるさず」と読み、匂いの強い食物や酒類など修行の妨げになるものを持ち込んではいけないという意味。特に禅宗寺院の門前にある。



寺町辞典

その3「下乗・下馬(札)」

神聖な境内に乗り物のまま入ってはいけないという意味。



>7 観音清水(高安寺)



>8 寺町ピオトープ(高安寺)

参道の愉しみ

長い長い石畳に杉木立、生垣と苔の緑もしっとりつややか。今、チェシャ猫が駆け抜けたって？



>12 本堂から見返す世界(久昌寺)



>10 三列石畳と杉並み(海院寺)



>11 杉並みの長い参道(海院寺)

お地藏さま

赤い頭巾で勢揃いの地藏学校、首のなくなった路傍の地藏さま。ひとつとして同じでない。子供たちと同じかな？



>14 小石を首になぞらせて(密蔵院)



>15 大きな笠のお地藏さま(久昌寺)



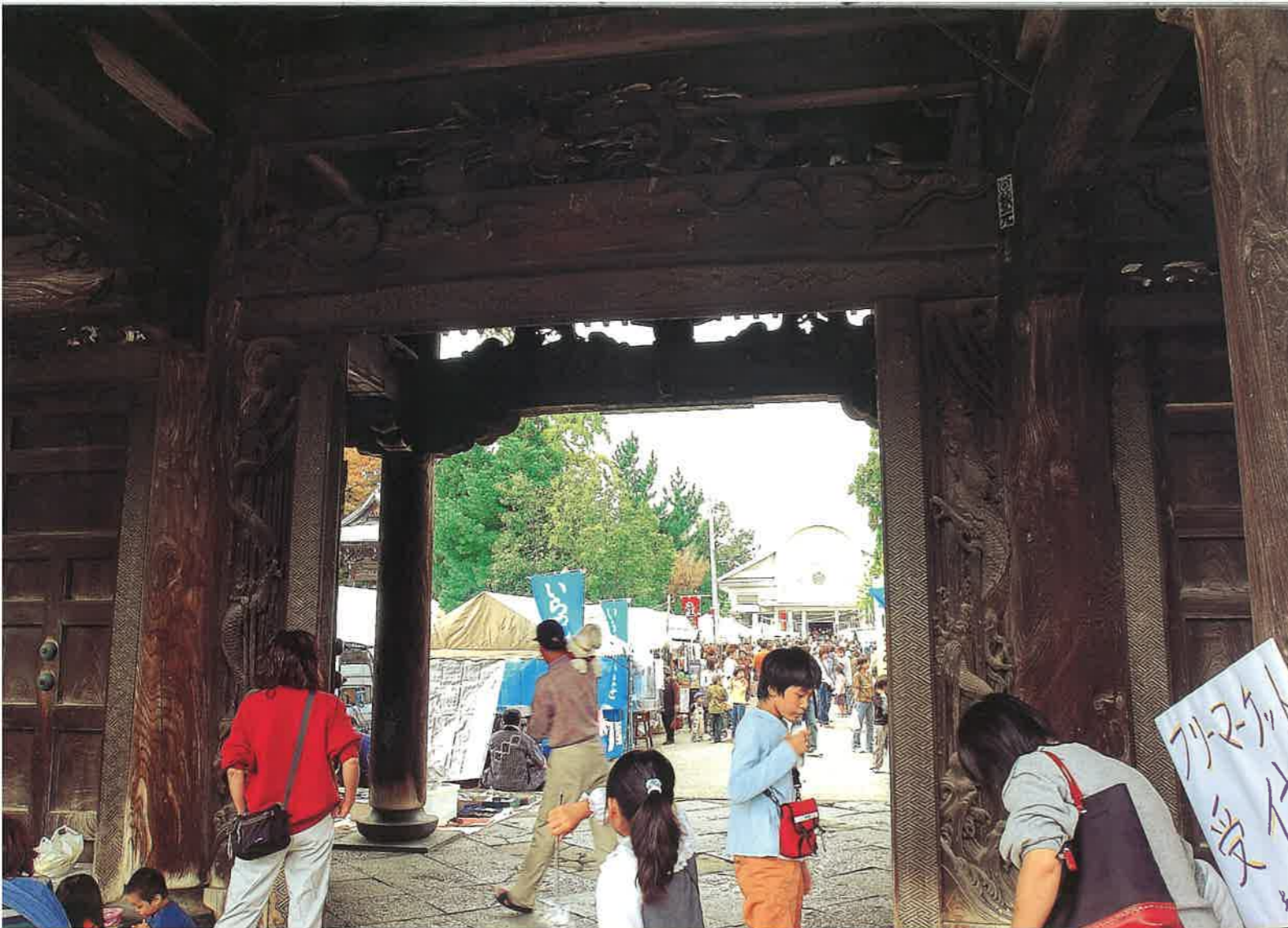
「鬼に金棒」は三途の川で見張り番。でも後から見れば、妙に愛らしいお尻が。 >17



>16 地藏様式学校 29名(大岩寺)

*寺町のお寺は、観光目的での拝観はしていませんので、拝観には失礼にならないように、ちょっと心遣いしましょう。





東本願寺高田別院報恩講(おたや)は時代とともに賑わいのようすも変化している。

一年を通して、寺院で行われるさまざまな行事は、今も、まちの人びとの日々の生活のなかに息づいています。サーカスの喧騒、アセチレン灯の匂い……、そんな昔の記憶ばかりではなく、今ではフリーマーケットやまちの人たちの手作りの屋台などで賑わいます。

寺まち横みち 出会うまち



寺町には猫が多いようだ。散策しているとよく見かける。(善導寺にて)



活動

p i c k u p

「寺町まちづくり協議会」

寺町まちづくり協議会は寺院群を生かした魅力あるまちづくりを行なうことを目的に平成7年から活動を続けています。これまでに、まちづくりの約束ごとの作成、寺院群案内看板の設置、ポケットパークの整備、寺院巡りガイドブックの発行、寺院ウオッチングの開催など多くの活動を行ってきました。今後の更なる活動が楽しみです。

「美しく咲く花も人に
愛でられてこそ……
寺町もそうあって欲しい」



Interview

ケーキショップ「ピカケ」ご夫妻
伊藤隆司さん よしさん

開店30年のケーキ屋さん「ピカケ」はお寺の町に小さく咲いたヒナギクみたい。心優しい奥様を慕って朝な夕なに猫たちが集まって来る。「お寺はちょっと怖いんだけど、屋根裏からの眺めがいいのよねえ… 静かな町を維持して欲しいわねえ。」
ご主人は、天宗寺から久昌寺へ連なる寺の景色を愛し、別院、おたやと用水に

揺れる桜並木を懐かしみ、多くの人が愛し訪れる寺町を願っている。
そんなピカケにはしばしお城博士や、遠来の町歩きのひとが立ち寄られるとか。ガラス張りの店は、いつも表寺町の季節の移り変わりの中に

寺町豆辞典

その4「円柱ポスト」

丸くて赤いポストは寺町にお似合いで、不思議の国の郵便局に届きそう。



寺町豆辞典

その5「山岡太夫の墓」(妙国寺)

安寿と厨子王の一行を山岡太夫に売った山岡太夫の墓と伝えられる石像がある。「おこり病」を鎮めるといわれた。



寺町万華鏡



Interview

「日朝寺」住職 遠藤教宣さん

桜の季節には新潟市や五泉市からも写真マニアが百人程来られる。何分にも老木ゆえ施肥は年3回、支柱も素人には限界、専門家の適格な助言がありがたい。寺町の魅力は、やはり緑豊かで心が和むこと。遠慮なく、山門を潜って境内や本堂をご覧下さい。花ロードや寺町サミットはそのきっかけになるし、「寺院めぐり」マップも役に立っている。現実には大型バス駐車場や経路がネック。もちろん観光優先ではないが、浄興寺の復原修理が終わり遠来のお客も増えるでしょう。昔は「寺町があるから高田は発展しない」とまで非難されたものだが、本当は皆でこのまちの良さを活かしながら育てていきたいですね。

「寺町の魅力は豊かな緑。
気軽に山門をくぐって境内へどうぞ」



Interview

陶芸家
斎藤尚明さん



「昔も今も、寺町は一つの大きな森のよう…」

久 昌寺裏の静かな一画、木造の落ち着いた玄関の佇まいに庭の緑が映えて、その向うに窯を据えた斎藤さんの工房があります。

前掛け姿で現れた斎藤さんは寺町の生まれ。子供時代の遊び場はお寺の墓地。このあたり一帯は森で、クワガタ・カブトムシ・セミの宝庫。桜並木の用水にはカワセミや鴨が飛来し、ドジョウやフナ、夏の夜はホタル。子供にとって毎日が冒険だったのでしょう。でも、蛭に食いつかれたり、墓地に浮かぶ鬼火を見たり、サスペンスもいっぱい毎日。

金谷村からは薪や炭を牛車で売りに来ていたそうですが、そんなゆったりした時代の寺町も昭和32年頃から民家が建ち始め、40年には大きく変化してい

ました。京都で陶芸を学び、お父様が昭和23年に築いた窯に戻って以来25年。

「たしかに寺町は変わったけれど、変わらないものはやはりお寺。少なくなったとはいえ、町全体が大きな森のように感じられる」「長い目でまちのことは大切」ということで、町並みや景観についても、機会があれば発言するように努めているとのこと。

ちょっと前通った時には、お住まいの脇で、穏やかな表情をした老犬が日向ぼっこ。寺町の風情に溶け込むような静かな暖かい時間が流れていました。登り窯のある工房を拝見した帰り際、裏寺町の墓地に隣あわせたその窓には、大きな壺のシルエットが浮かんでいました。



寺横出 会いみち



寺町の声 Interview

- 「小学生の頃は、お寺のまえを流れる用水に蓋はされていなくて、ちょっとした小川のようにあり、そこでザリガニを捕ったり花火をして遊びました。今の寺町通りは車が多すぎるので、自転車や歩行者が安心して寺町を散策できるように策が必要だと思います」(男性・28才)
- 「古いまちなみを感じさせるところも残り風情があります。またお盆にあちこちのお寺で灯されるろうそくは夏の風物です。」(女性・24才)
- 「最初は怖かった。でも静かでとてもいいところ！寺町の人はみんな優しいアス！」(外国籍・女性・20才)

*寺町めぐりには、寺町まちづくり協議会発行の「寺院めぐり」が便利です。

essay

寺町に暮らして

児童文学作家 杉みき子



父が仕事の関係で信州から高田へ越して来て、寺町に家を建てたのが昭和二年。当時の寺町は、お寺ばかりの中にぼつんぼつんと民家がある程度で、会社の同僚などからは、「あんな原っぱに家を建ててどうするんだ」と笑われたそう。でも、それから数年もたないうちに、近所となりにつきつぎと家が建ち、私の物ごころついたころには、すでに現在とほとんど変わらない小路が形成されていました。小さい子どもにとっては、自分の住んでいるところが世界の中心です。私の世界の中心には、ごく自然なこととして、あれこれのお寺がひかえていてくれました。



冬になれば、小さいスキーをはいで、毎日あきずにかよった善導寺の山。ここは、大正四年の寺町大火のとき焼失した本堂あとの小高い丘で、今はその上りつぽなお堂が再建されていますが、当時は近所の子どもたちにとって、おあつらえむきのスキー場でした。また、秋の日ぐれがたは、この善導寺の森に、何千羽というカラスが群れて、夕焼け空もまっ黒になるほどにねぐらを争う壮観を、縁側につつ立って、あかず眺めたものです。カラス、カラス、ゼンドジのカラス。いまは学問に志して？ 上教大のキャンパス近くに居を移したカラスたち、記憶の遺伝子のなかに、当時の子どもたちの歌声を、かすかに残してはいないでしょうか。浄興寺の寺内には、そのころ、六年生の「おひいちゃま」をリーダーに、女の子数人の異年齢集団があり、一年生になったとき誘ってもらったのがきっかけで、ここへも毎日のように出向いて、文化財のお寺の中を、いっしょにかけ回っていました。浄興寺では、日曜学校がひらかれていた時期もあり、若い坊さんや師範学校の学生さんが、お話をしたり遊んでくれたのが楽しかったものです。そして長徳寺の、賽の河原のお地藏さま。そのかわらの小さなほこらに、死

んだ子どもの形代として納められた人形たちの胸に、行年何歳と幼い年を記されていた文字が、死ということを私に初めて教えてくれました。とりたてて仏教の勉強をしたわけでもなく、それどころかお経ひとつよめるわけでもないのに、自分の宗教を問われれば、なんのためらいもなく「仏教徒です」と口に出るのは、やはり、仏さまとなんとなく仲よくしているつもり、寺町育ちのたまものということでしょう。子どものころ、浄興寺の山門の前に立って、北の方角を見わたすと、裏寺町の長い長い一本道が、はてしもなく続いていました。両側のお寺の森がうっそうと繁って昼でもうす暗く、ひとり歩きするのはこわいような道です。その道のはるかかなた、森がわずかとぎれたところに、きまつてふしぎに美しい青空がのぞいていました。それを見るたび、あの青空の下には、どんな美しいすばらしい町があるのだろうか、いつも思いました。今は舗装されて広くなり、森もあらかた伐られて明るい道になりましたが、浄興寺の山門の前に立って北の方角を見るたび、あの青空の下にはどんな美しい町があるのだろうか、今でもつい思います。寺町とは私にとって、そんな見はてぬ夢へとつづく町でもあるのです。土地には地霊というものがあると私は信じていますが、高田寺町の地霊にとりつかれて七十余年、この分ではこの先も、生涯ここ以外の土地に住むことはないでしょう。

プチ景観みつけた。

わたしだけが知っている
とっておきの場所

まちかど 動物園 ZOO

まちなかで視線をちまっと変えてみると、意外にもまちの中にある動物園がいっぱい。ことに気が付きます。さあ、みんなで「まちかど動物園」に出かけてみましょう。



(愛宕神社)



(渡辺内科医院)



(佐渡汽船乗り場前の公園)



(愛宕神社)



(本町通り)



(水族館蛇口)



(ペンギンゴミ箱)



(アイリス早津)

Petite Landscape in Joetsu



(直江津、関川河口付近)



(日本キリスト教団高田教会)



(くらげ)

(戦没馬慰霊碑)



(直江津捕虜収容所跡の平和記念公園の車止め)



(上越産業 資材置場)



(HOK 上越店)



(こがね保育園)



(姉妹都市中国琿春市から来た市民プラザ獅子像)



(ヨーテル金谷前)

(直江津港の海浜公園のトイレ)



耕す人、蒔く人、植える人、水遣りの人、草取る人…、一人から始めた小さなことが、大きな花の輪になって、大きな力になって、新しい<まちの眺め>を紡ぎだす。



約 200 人のボランティアの人が参加。耕した土地にコスモスの種をまいています。

活動レポート

市民一人ひとりから始まる景観形成のひろがり

眺めを紡ぐひとびと

Activity

「関川河川敷に満開の花畑」

(上越市塩屋新田)

1998年2月、能生町徳合地区に住む塚越秋三さんは、友人が入院した労災病院へ見舞いに訪れたのがきっかけとなって

「労災病院に入院している友人や患者さんたちを勇気づけたい」

そんな想いから関川下流(労災病院から見て対岸の塩屋新田)に花畑をつくる取り組みをはじめました。

当時、塚越さんは自動車整備の仕事で上越市内の企業に勤めていました。

まず国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所を訪ね、担当者から協力を得ることができました。

それが力となり上越市役所へと協力の輪が広がっていきました。

初めは、労災病院から一番よくみえる関川大橋下流河川敷の東側だけに花畑をつくる予定でしたが、上越市役所の希望で関川大橋の上流東側にも作っていくことになっていきました。

そこは毎年行われている上越レガッタゴール地点の前でもあったのです。



成れる現子。コスモスを背景に記念撮影。新たな「ながめ」が生まれた瞬間。



労災病院7階談話室よりコスモス畑を望む。遠くの山並みから手前の関川へわたる眺めで、ひととき映えるピンク色の絨毯。



種を蒔くための人手や重機が必要になってくるため、塚越さんは、地元の土建業社や各種企業に呼びかけ、合計40社の協力を得、その他に公務員やその知り合いの人たちとへと話が伝わっていきました。

また資金を作るために各企業から、お金ではなくアルミ缶を回収させてもらい、それを換金し資金にしました。

種を蒔く前にこの広い土地の雑草を刈り、土地を耕さなければなりません。塚越さんと親しい有志で作業を始めましたが、時間をかけて耕した割には、対岸から見てみると思ったより小さく、現在の大きさになるまでは、かなりの手間と時間がかかったそうです。

そして、いよいよ種を蒔く日が訪れました。声をかけた企業や人々が集まり、初回ながら100人を越えました。

種を蒔いた後も、塚越さんは毎週通っ

て手入れをしていきましたが、土の養分が足りないせいか花が咲く前に葉が次々と枯れてしまいました。

その後、毎年チャレンジしましたが、なかなか一面に咲き誇らず、5年目の2003年の春、自費も投入して大掛りな土壌改良を行いました。

その年の夏、約200人の参加者たちの協力と願いが通じたのか、秋には見事なコスモスが一面に咲き誇りました。

各メディアからも取り上げられ、多くの人が訪れるようになりました。

塚越さんが手入れに花畑にいと、次々と観客が訪れ、その光景に感動したそうです。

しかし、残念なことに訪れる人の中に勝手にコスモスを刈り取って持っていく人がいることです。

そして、2004年にはまた新たな計画を始めている塚越さんは、次の段階として、

「関川流域住民の人たちが、自分たちの河川だということを自覚して、自主的にプランを練って活動していただくようになれば、一番うれしい」と語ってくれました。



View making to the next generation

「御館川沿いに 花の散歩道をつくる夫婦」

(石橋2丁目)



北陸本線・信越本線を行き交う列車の車窓からの眺めもきれい。

上越大通りに架かる御館橋の西側は、かつて菓子工場があったところで、工場の閉鎖とともに宅地化されて新しい住宅団地ができました。この団地の御館川に面した一軒のお宅が、東頸城の牧村から移ってきた羽深さん一家です。

羽深さんが引っ越してきた当時(1998)、御館川沿いの小道には雑草や蔓がはびこって荒れ放題、とても歩けるような状態ではありませんでした。

それを見かねた羽深さん夫妻は、2ヶ

月ほどかけて雑草や硬い蔓を刈り、500mほど歩けるようにしました。しかし、ただ歩けるだけでは……と思った二人は、花を植えようと思い立ち整地を始めました。事情を知らない通りかかりの人に、

「お前ら、なんの権利があって、勝手にやっているんだ」

と、心無い言葉を浴びせられたこともあったそうです。ご夫妻はそれにも挫けず、自費で種を買ってきて蒔きました。さすがに最初の年はうまく咲かなかったようですが、2003年春、思いどおりの菜の花が咲きそるいました。

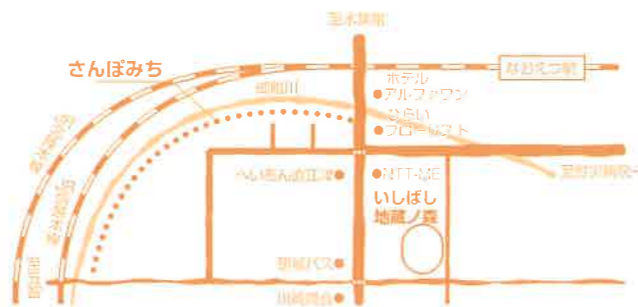
今では春は菜の花、秋にはコスモスが咲き、五智の保育園児が楽しそうに散歩したり、大通りから花を見つけて、いつもとは違うこの小道へ回り道して歩いて

行く人を見ていると、ついつい顔がほころんでしまうそうです。このように通り難かった御館川沿いの土手の道は、花の散歩道として地域の人々に愛されはじめました。また、川の向こうには北陸線・信越線が走り、通過する列車の乗客の目も楽しませてくれているようです。

御館川は、アオサギ、カモ、フナ、80cmを超えるコイなどがいて、陽だまりのなかで釣りを楽しむ親子づれの姿も見られます。



生まれ変わった御館川沿い。毎年菜の花・コスモスを植えている羽深さんご夫妻。



「空き地を コミュニティに 変えた周辺住民」

～いしばし地蔵ノ森～

(石橋1丁目)

「景観」第3号(2001年発行)の活動レポートに取り上げられた「いしばし地蔵ノ森」が直江津駅南地域の集いの場として動き始めました。

石橋の「地蔵ノ森」は、石橋1・2丁目のシンボルである「石橋地蔵」に隣接する空き地のことで、1999年、石橋1・2丁目町内会と上越市が協議して、地権者の直江津各宗協会の協力を得て、市民活動でこの空き地を緑のコミュニティ(よりどころ)として整備しようという計画が持ち上がりました。翌年、町内会よりも広域に活動できる委員会「地蔵ノ森実行委員会」を設立し、NPO法人木と遊ぶ研究所と都市計画プロジェクトを提携してハウジング&コミュニティ財団から助成金を受け、また「上越市2000年ミレニアムイベント事業」に応募して優秀賞を受賞しました。それらのお金を



基に整備を進め、将来像を地域や行政に示して働きかけて、将来「沢山の木陰ができる公園にしよう」と、地域のお宅の庭の木を移植してもらったり、50本以上の木が緑のオーナーによって植えられました。その記念事業として、津軽三味線による初の野外コンサートも開かれました。

2001年には上越市のまちづくり支援事業として、駅南地区(東雲町・栄町・石橋1・2丁目)

のコミュニティ構想に発展し、また新潟県都市緑化財団から土地所有者と市民団体が協働で取り組むパートナーシップ事業の支援を受けて、植樹を増やしてきました。この年には、上越文化会館主幹のふれあいコンサートで、琴とブラスアンサンブルの野外コンサートを開きました。



昭和34年。御館川橋からみる地蔵の森(左)。



上越市のまちづくり支援事業により造られたステージの完成記念イベントにて合唱する直江津南小学校の生徒たち。



2002年、いよいよ上越市まちづくり支援事業計画が具体化し「いしばし地蔵ノ森まちづくり構想」がスタートしました。住民参加で作っていた木製野外ステージが翌年3

月に完成すると、4月には完成を祝って直江津南小学校金管部と地域の人たちによるふれあいコンサートが開催されました。夏休みには「自分たちが遊ぶ道具は自分たちで作ろう」と、石橋1・2丁目町内会といしばし地蔵ノ森実行委員会の共催で、小学生と保護者による公園の遊具(カラフルストーンブロック)づくり活動を行いました。10月には再び文化会館のふれあいコンサートが催され、「鼓」のワークショップを行いました。

地蔵ノ森のあるところは周囲より一段高く、古くは地蔵屋敷と呼ばれて遠くからでも松林を見ることができました。かつては今町道または今町街道といわれ

る直江津と高田を結ぶ幹線道路で、松林はちょうどオアシスのよう

でした。国道18号線が開通するまではバスも通っていましたが、ここに祀られているお地蔵さまは、眼病にご利益があるといわれて、大変信仰されていたという

ことです。他町内会と比べて歴史の浅い石橋1・2丁目の人たちにとって、このお地蔵さまはランドマーク(シンボル)のような存在です。

この土地は直江津各宗教会の所有で、長いあいだNTT(旧電電公社)が借り受け、地盤を鉄筋コンクリートで頑丈に固めて電柱置き場としていました。時代の流れと共に電柱置き場の役目も終わり現在にいたっています。

このように、古くから集落と集落を結ぶ街道のオアシスだったところが、時代が変わり、まちの開発とともに資材置き場になり、地域の願いと働きによって、再びコミュニティとして地域のオアシスが復活したのです。(倉林)



地蔵の森の脇に流れる用水沿いに紫陽花とハナミズキが植えられている。

View making
to the next
generation

まちは舞台! みんなが主役

「景観」は、私たちを取り巻く日常的な環境の眺めであり、美しい景観形成に向けては、市民・事業者・行政それぞれが景観を意識した取組みを続ける必要があります。ここでは、景観形成に向けた市の取組みを紹介します。

*Our town is a stage!
We all have a major role!*

あまのり 景観セミナー

上越市では、景観形成に対する意識高揚、知識向上のため、平成12年度より色彩、照明、サイン(案内標識)などをテーマに「景観セミナー」を実施してきました。

15年度は、照明計画家の稲葉裕氏を講師に迎え、高田の寺町を舞台に、市民の皆さんと一緒に手作りのあかりでお寺の境内や参道を演出しながら夜の景観について考えました。上越市では今後も、美しい景観づくりを目指して、景観セミナーを実施していきます。



第1回
講師より他の自治体での取組みを紹介してもらった後、演出方法や演出する対象などについて、参加者全員で話し合いを行いました。



第2回
本番に向けて、手作りのあかりを並べてみたり、いくつかの照明器具で明るさの比較を行ったりして、素敵な演出方法を現場で実験しました。



第3回
浄興寺の境内から本町通りまでの参道を、これまで準備してきた手作りのあかりによって演出しました。沿道の住民の皆さんも手作りのあかりで「自宅の前を演出してくれました。また、多くの市民の方々が寺町を訪れ、大変賑わいました。



謙信公大橋がグッドデザイン賞を受賞しました。



上越市の東西を結ぶため関川に架けられた謙信公大橋が平成15年5月に開通し、2003年度建築環境デザイン部門/環境デザインにおいてグッドデザイン賞を受賞しました。この橋は、背後にそびえる妙高連峰の眺望や冬の落雪を考慮して大小2連のアーチ構造となっています。また、周辺の田園風景や河川風景と調和し、冬の雪景色にも馴染むように薄い黄色系の色となっています。

景観デザイン賞 一時休止のお知らせ

平成7年度から14年度まで毎年行なってきました景観デザイン賞は昨年度より一時休止しています。17年度には再び実施する予定ですので皆さんも紹介したい景観を探してみてください。

景観形成に重大な 影響を及ぼす行為の届出と 景観アドバイザー制度について

ドラッグストアの色彩



黄色をコーポレートカラーにしているドラッグストアです。当初の計画では建物全体に黄色を塗る予定でしたが、アドバイスの結果、隣接する一般住宅などの周辺環境に配慮して、店舗正面の上部のみにコーポレートカラーの黄色を採用し、他の面については、周辺への影響の少ない薄い色に変更していただきました。

市では、適正な景観形成への誘導を図るため、上越市景観条例に基づいて「景観形成に重大な影響を及ぼす行為」等を指定しました。これにより、一定規模を超える建設等に際して市への届出が必要となりました。また、これに伴い、建築物や工作物、広告物などのデザイン、色彩などについて周辺景観に調和させるには、どのようなことに配慮したらよいかなどの視点から、専門家のアドバイスを実施しています。ここでは、15年度にアドバイス制度を活用した事例を一部紹介します。制度の詳細については市のホームページをご覧ください。

正善寺サイン計画



正善寺のまちづくり協議会によって設置された「あじさいロード」のPR看板です。当初はアルミ製の看板に図のようなデザインで計画されていましたが、アドバイスの結果、里山の周辺景観に調和した木製の看板に変更していただきました。この他、上越市では公共公益施設のサインについては、統一したデザインで整備しています。

読者 からの お便り



身近な、風雪に耐えた、歴史風土を感じさせる景観は、本当に、宝であり、上越人としてのアイデンティティーを生み出すものだと感じております。(本城町・赤羽孝之)



この冊子をいただくと、越後で上越ほど自然的にも文化的にも景観に恵まれた所はないと思う。テーマごとに見回すと歴史的な景観、躍動的な現代の景観が幾つかずつまとまっているのが分かる。しかも、どの景観の中にも私たちの今の生活がとけこんでいるのが素晴らしい。(岩木・茨木武夫)



上越の景観にはまだまだ素晴らしい所や物が沢山あることを知ることができた。ただ、一つひとつが素晴らしいだけではパワー不足だと思った。上越に2年住んでいたが、景観を統一した通りが少ないと感じた。統一された建築物などが集まれば、小さいものでも大きなパワーが生まれる。それが観光客を呼べる源になると思うし、地元の人達の誇りにもなると思う。(北海道小樽市・笠原恵津子)



上越にこんな素晴らしい建物があったのかと考えさせられてしまいます。照明一つにしても何も考えていなかったのですが、一つひとつとても個性的でアートですね。それだけ何げなく通っているだけなんだなと感じました。何げなく通っている人のほうが多いと思いますが、私はこれから、上越のいろいろな所を見て回りたいです。(上原入・樋口恭子)

編集後記

寺町の魅力にとりつかれた2人の編集委員が、1年かけて、とうとう66のお寺を全て巡ってしまいました。観光化された寺院でない分、感動的な出会いや、しみじみとしたひと時があったようです。一つひとつ違う歴史を刻んできた66の寺々、その中に溶け込むようにして日々の生活を営むく寺町の人々、それが織なすまちの景観……。市街地に接して、寺院の境内が生み出す清浄な自然空間とその歴史を享受できる私達は、幸せだと思います。(さ)

表紙写真/真宗大谷派高田別院で行われる報恩講の賑わい。
裏表紙写真/寺町の浄興寺で行われた山門コンサートのようす。

編集委員/佐藤和夫(出版業/本誌編集長)
磯田一裕(建築家)
魚家明子(詩人)
太田均(デザイナー/本誌アートディレクター)
倉林哲生(デザイナー)
せきゆうこ(建築家)
樋口善美代(イラストレーター)

発行/歴史・景観まちづくり推進室